

当協会における肺がん検診の現状

○ 渡辺晃成、相澤裕司、佐藤孝之、嶋原幹直、茂木俊一、阿部雅浩、橋本元秀、亀山欣之、鈴木美保子、鈴木仁

公益財団法人福島県保健衛生協会県南地区センター

【目的】昭和62年に老人保健事業として肺がん検診が導入され、以来25年を経た現在、導入当初に比して肺がん検診に関する環境はかなり変化した。そこで今回、当協会における肺がん検診の現状を改めて把握し、問題点を抽出することを目的として検討を行った。

【対象と方法】2010年度の肺がん検診受診者238,280名および発見がん症例82例、そして当協会の肺がん検診車12台を対象とした。これら当該年度の受診者と発見がん症例の傾向、および当協会における肺がん検診車状況

について検討した。

【結果】受診者の傾向は、男性 118,141 名、女性 120,139 名であって、それぞれ 12 万人弱が受診していた。男女共 60 歳代前半にピークがあり、50 歳未満では男性が多かったが、50 歳以上では女性の受診者が多かった。要精検率は男性 3.2%、女性 2.4% と男性が高かった。発見がんについては、男性 61 例、女性 21 例と男性が約 75% を占め、年齢階級別では男性が 70 代前半、女性が 60 代後半にピークを有し、女性の方が若干ではあるが若い世代に多く発見される傾向が見られた。病理組織別にみると男女共に腺がんが最も多く、女性ではほとんどが腺がんであり、男性では扁平上皮がんがこれに次いでいた。また、病期分類別では I A 期が最も多く、全体の 33% を占めていた。検診車の状況については、使用期間別にみると、半数が 15 年以上使用している検診車であった。

【考察】受診者は、多少だが女性の方が多

く、女性の健康への関心の深さが伺われた。発見がんについては、ほとんどが腺がんであり、扁平上皮がんは男性にのみ認められた。病期別では33%と割合は低いもののIA期が最も多く、肺がん検診が早期発見に大いに寄与していると考えられた。しかし、III A期以上にまで進行したがんがIA期と同数存在していたことは、逐年検診であることを考慮すると、さらなる診断能の向上が望まれることを示していた。検診車の状況については、過半数が15年以上経過した老朽車両であり、早急に更新が望まれるが、間接撮影装置が販売終了している現在、他の撮影方法を選定し、その方法に適合した新しいワークフローを構築することが必要であると思われる。また、2010年に発表されたRCTであるNational Lung Screening Trialでは低線量CTが胸部単純XPに対し肺がん死亡率を20%低減させることが報告されており、今後の厚労省の動向についても注目して行きたいと考えている。